

浦井先生から頂いた問いについて

2017年7月9日
村田晴夫

浦井先生から、「哲学における学としての制約とAIの黒魔術化」（前中後編）の中で、村田のこれまでの論文を含む記述に関して、いくつかの重要なご指摘とご質問、コメントを頂きました。感謝します。

整理すると以下の3つの問いにまとめられるであります：

- I. 「システム不完全性の原理」 II. 「真・善・美の捉え方」 III. 「哲学が『学』として成立するための制約について」

それぞれの問題にたいして、十分な答えとまではいかないが、感想を書きます。

I. 「システム不完全性の原理」

浦井先生のコメント《村田晴夫先生の言われる「システム不完全性の原理」というのは、従って私には大変納得のいくものです。村田先生はこれを、人間あるいは組織が成り行く becoming ということやホワイトヘッド哲学的なものを背景にした原理として扱っておられると思います。当方は、そのような原理が一般的に成立するための条件を（数学的あるいはできるだけ普遍的な形で）模索したいと願っております。》

村田：浦井先生のおっしゃるとおりです。「システム不完全性の原理」に注目してくださいって嬉しいことです。

このような表現ではありませんが、この考え方の基礎はホワイトヘッドにあります。『観念の冒険』（AI）第19章「冒険」第2節に次のような叙述が見えます。

No static maintenance of perfection is possible. This axiom is rooted in the nature of things. Advance or Decadance are the only choices offered to mankind. 「完全性を静態的に維持することは不可能である・・・」

ホワイトヘッド自身が「システム不完全性の原理」ということばを使っているわけではありませんが、プロセス思想そのものが、あらゆるシステムは原理的に不完全であることを主張しているとも言えると思います。

II. 「真善美」の捉え方

浦井先生のコメント《福井先生と私が共通して疑問と捉えているものですが、村田先生のアンデレクロスにおける「真善美」の捉え方についてです。ホワイトヘッド哲学的なものをベースに、村田先生はこれらが究極的には一致するという立場を取っておられます。ホワイトヘッド哲学の上であくまで話をするという場合であれば（このあたり当方まだまだ不勉強で申し訳ありませんが）良いのかと思われそうですが、ホワイトヘッド哲学の素人からすると、「真善美」が一致しなかったらどうなるのか、という疑問が出てまいります。私は、これは一致というよりも、整合的である、つまり究極的に真も善も美も、それぞれが追求して出てきたことを、互いに尊重し、共存できる、という意味ではないか、と捉えております》

村田：真善美の究極的一致に関する私論

私（村田）は以前に、「組織における美と倫理」（『組織科学』Vol.33.No.3, 2000.）という論文を書いて、その中で組織における真・善・美が究極的には一致することを主張しました。その趣旨は概ね以下の通りです。

まず究極の真・善・美は世界の根源において現れるものであること、言い換えれば宇宙の根底においてひとつなのだということ、これが主張のエッセンスである。

真・善・美は対象となる世界において、その世界に向き合う意識の判断として想定される宇宙の法である。ここで「法」とはものごとの有りようの本質を意味する。

真・善・美には、それに対応する意識として思惟・意志・想像が分類される。またそれらを別の表現で、知・意・情と言い換えてもよい。

前掲の論文では、この宇宙の本質と人間の意識とは一体的なものでなければならず、そこには相互の同型性が成立していることを主張し、人間の組織においてもまた、その同型性が成立していることを主張したのであった。

このような主張はホワイトヘッド、バーナード、そして西田幾多郎に依拠している。西田幾多郎『善の研究』からそのエッセンスを引いておきます。

「しばしば言ったように世界は自己の意識統一に由りて成立するといってもよし、また自己は実在のある特殊な小体系といってもよい。仏教の根本思想であるように、自己と宇宙とは同一の根拠を持っている。否直ちに同一物である。このゆえにわれわれは自己の心の内において、知識では無限の真理として、感情では無限の美として、意志では無限の善として、皆実在無限の意義を感じることができるのである。われわれが実在を知るといのは、自己の外の物を知るのではない、自己自身を知るのである。実在の真善美は直ちに自己の真善美でなければならぬ」（西田幾多郎『善の研究』全集第1巻、第13章、164頁）

「善の概念は美の概念と近接してくる。美とは物が理想のごとくに実現する場合に感ぜらるるのである。・・・人間が人間の本性を現じた時は美の頂上に達するのである。善はすなわち美である」（西田幾多郎『善の研究』全集第1巻、第9章、145-146頁）

西田では、真・善・美に人間の意識を対応させて、思惟・意志・想像を当てることができるといっている。人間の持つ意識の力というものをそれぞれに發揮して、真善美を探究するとき、自然と精神の統一ということを考える（『善の研究』）。そこに主客未分の純粹經驗という原点が現れて、究極における真善美の一致ということが生きるのである。

むしろ真・善・美が一体化していることこそ原点なのであって、それが営みにおいて分化してくると考えるべきであろう。

西田においては、主客合一の地点に立っている。われわれもまた無限ともいえるべき飛躍を経た地点に立つことによって真・善・美の究極における一致ということが言えるのであって、有限の世界ではそれが保証されない。それは時代と文化によって相違するであろうが、われわれの近代文明においては、真・善・美はむしろ相互に分離した領域と捉えられている。そのような文明においては、真・善・美の究極における一致という共通認識が現実においてメリットをもたらすと考えられる。以下の例示はその一端を示すであろう。

ホワイトヘッドの哲学では、Truthful Beauty（真的美）と言われる（AI）。また Poetic Insight（詩的洞察）とも言われる（SMW）。山本誠作はこれを「情的知」という言い方で受け継ぐ。村田はこれを情緒的創造力と表現している（村田晴夫『管理の哲学』）。

Ⅲ. 哲学が「学」として成立するための制約について

浦井先生のコメント《哲学の「学」ということに「制約」を与えると、強いて述べましたが、それはそのことにむしろ警戒していただきたいと思ったからです。同時に「それを通じて初めてできることがある」、ということも、強調したかったからです。制約を入れないと、自由がすべてになってしまい、村田先生の表現を使わせて頂くと「自由と愛の葛藤」が生じないこととなります。あるいは制約を曖昧にしておくと、その葛藤が骨抜きになります。実際、その曖昧さ故に、葛藤は学問の外に追いやられてしまいます。》

《村田先生が「哲学として語る」ことにおいて上のように述べられた「価値観を排除した語り」ということについて、そのための方策の一つが、私は「関係性」化するという事だと思っております。「関係性化する」ということ。これは特に20世紀中盤以降、普遍的な論理ということを考える上で、まさしく鍵といえますか、有力な道具あるいは方針になって来ていると思います。数学においては圏論、社会学においても関係性的転回といったものがそれに当たると思っています（西田と「脱底（存在論）化 de-ontologizing」については、田中裕先生の論文を、大変参考にさせて頂きました）》

村田：Ⅲに関する論点は、学とは何か、という問いに関係している。学とは何かを問うことは哲学の領分である。しかし、浦井先生の問題提起は、その哲学における「自由」と「制約」を問っている。

私が先の研究会で提起した類似の問題は「経営哲学とは何か」という問題であった。そ

れに対して私が出した答えは、〔1〕経営の意味を探究すること、〔2〕経営学の方法論を論じ、探究すること、〔3〕経営者の哲学を探究することの3領分をその領分として、これらの3領分は究極的には一致する、ということであった。それはまた自己批判の可能性をも内包していて、自己言及あるいは自己組織化の条件を満たすと思われる。

しかしこれは「経営哲学」という限定があつての論述である。このような限定、あるいは制約、があつて「学」あるいは「哲学」を語ることはできないのではないだろうか。

浦井先生の問題提起をなおよく考えてみたい。ついては「脱底（存在論）化 de-ontologizing」について、その意味あるいはイメージを教えて欲しいのですが。